

コンテインメント：コンテイナー - コンテインド

三地域エントリー

地域間コンサルタント：Louis Brunet（北米）、Vera Regina Fonseca（中南米）、
Dimitris-James Jackson（ヨーロッパ）

地域間連携共同議長：Eva D. Papiasvili（北米）

I. 定義

コンテイナー - コンテインドという Wilfred R. Bion の概念は、母親－乳児間の養育状況という観点から分析的カップルの状況を類推するためのものであった。この概念が示すのは、母親は、なだめたり授乳したりすることの提供者であるのみならず、乳児の情緒的苦痛を受け取り、乳児のためにその苦痛を和らげて等身大の取り扱いへと戻すことができる受容器官でもある、ということである。Bion の観点からは、大体においてそれは、O（名づけようのない恐怖という意味において）から K（知識）へと苦痛を変形することを意味する。「この考えられないものについて、今や私は考えることができる！」というように。

理論の進展という視点からいうと、この概念は、投影同一化（投影同一化 PROJECTIVE IDENTIFICATION の項を参照）の理論が、原始的空想と防衛の理論から、考えることの発達に必要な、伝達／コミュニケーションの原始的形態の理論へと拡張したことを表す。

精神機能に関する関係性のモデルとして、コンテインメントの過程は、コンテイナー - コンテインドというペア間の直線的で互惠的な相互作用を、次のような手順で拡張する。ある精神状態（「内容 content」）が送り手から受け手へと伝達される；受け手はそれを潜在的に「包含／コンテイン」し、心的作業を通して変形する；その変形された内容は、「コンテインする機能」そのものとともに、送り手によって恐らくその後再び取り入れられる。

発達の観点からのこのモデルの原型は母親－乳児関係であるが、この概念はまた、精神分析過程においてはもちろん、二者間の関係や集団のいずれにおいても生じるある種特別な無意識的コミュニケーションにも、適用できる。それはまた、精神的過程—そこにおいて人は、自身の情緒をコンテインし、転換／変形し、そして言葉で伝えようとする—を理解することにも、適用される。

臨床状況においては、コンテインメントの過程は、精神分析過程を理解することによって、

そして考えること／象徴化することの発達にとって、特別な意義を持つ。技術的にはそれは、乳児／患者の叫び、あるいはその他の苦痛の表現に黙って耐える以上のことを意味する。コンテインメントは、可能なときにはその苦痛に対処するなかでそれを同定し、変形し、解釈することを伴う。

以上の多次元的な定義は、三大陸に及ぶ地域の辞書や百科事典を反映し、それらから推定し、そしてそれらを拡張している (Lopez-Corvo, 2003; Skelton, 2006; Auchincloss and Samberg, 2012)。

II. 本概念の起源

本概念は、1940年代の英国における、統合失調症（精神病性の思考障害）に関する臨床研究に根差している。そうした研究は、Melanie Klein と彼女の後継者である Herbert Rosenfeld、Hanna Segal、そして Wilfred R. Bion によってなされた。（本用語はまた、戦時中に戦車隊司令官だった WR Bion の経験にも恐らく結びついている。軍事用語としてのコンテインメントの含意は、戦場において戦闘を必ずしも根絶するのではなく制限し、最小化し、そしてより扱いやすくするということである。）

Klein の「分裂的機制についての覚書」(1946)では、統合失調症の病理の固着点が乳児生活の原始的で早期の相—誕生から3か月までであり、彼女が「妄想-分裂」ポジションと呼んだもの—にあるという彼女の見解が明らかにされている。このポジションにおいては、部分対象関係、迫害不安と絶滅不安、そしてスプリッティングや投影同一化および否認と万能感などの原始的防衛機制が活発である。Rosenfeld (1959, 1969)は、自身の臨床研究 (1950—1970)において投影同一化の理解を特に深めた。患者の乳児的で原始的な世界における過程を彼は明らかにした：患者は内的対象、部分対象そして自己の葛藤的部分を対象—母親の乳房と体／治療者—へと投影し、対象を通してそれらに対処しようとする。その後それらを再び取り入れることで自己の一部とし、そしてそれらに同一化する。この投影と再取り入れの過程が、コンテイナー - コンテインドに関する Bion の研究の基礎部分となった。

コンテイナー - コンテインド理論が最初に言及されたのは、Bion の 1950 年代の著作、とりわけ「統合失調症的思考の発達」(1956, Bion, 1984 に収録)、「精神病パーソナリティの非精神病パーソナリティからの識別」(1957, Bion, 1984 に収録)、「幻覚について」(1958, Bion 1984 に収録)、「連結することへの攻撃」(1959)においてであった。Melanie

Klein の投影同一化に関する理論 (Klein, 1946)の範囲内で乳房に対する赤ん坊の関係に言及しつつ、彼は、新生児が体験する崩壊や死の不安に向き合うには、母親／乳房と赤ん坊の間の適合がいかに重要であることを強調する。情緒に向き合いそれらを修正して情緒的に知ることを可能にするとなると、コンテイナーである乳房が申し分なく存在していることが鍵となる。こうして、自我の原始的な防衛という投影同一化の概念についての Bion の定式化は、コンテイナー - コンテインドモデルに暗に含まれる、標準的な発達の現実的な投影同一化という叙述へと進展していく。

Ⅲ. コンテイナー - コンテインド (コンテインメント) : Bion における概念の進展

1959 年の論文「連結することへの攻撃」(Bion, 1959)において、Bion は、投影同一化を頼りに自身のパーソナリティの諸部分を分析家へと排泄する、ある精神病患者との体験を叙述した。患者の観点からすると、もしもそうした諸部分が十分に長く分析家のなかに留まることを許されるなら、それらは分析家の心による修正を受け、そののちに安全に再取り入れされる。自らの投影物を分析家があまりにも素早く排泄してしまい、つまりは諸感情が修正されなかったと患者に感じられたとき、いかにして患者がそれらを、更に死に物狂いで暴力的に分析家へと (再) 投影しようとすることによって反応したかということ、Bion は叙述している。この臨床過程を、Bion は、患者のある体験—乳児の投影物を取り入れることに耐えられずに乳児から投影された恐怖をコンテインしなかった母親との体験—と結びつける。Bion は次のように示唆している。「理解ある母親は、この赤ん坊が投影同一化によって対処しようと懸命になっていた恐怖という感情を体験することができ、そしてそれでもなお、バランスのとれた見地を保つことができるのである」(Bion, 1959, p. 103-104)。

1962 年には、著書『経験から学ぶこと』および論文「考えることに関する理論」において、Bion (1962, a, b)はこうした考えをさらに発展させ、母親が乳児から投影される強い恐怖を取り入れてコンテインするときの母親の受容的な心の状態を、もの想い *reverie* と述べた。母親のもの想いというアイデアを投影同一化のアイデアに加えることによって、Bion は、環境がいかにして原初の関係を通して精神的発達に影響を及ぼすのかということを含めている。もの想いとは、子どもによって投影されるものに母親が無意識的に同一化して応じる、その受容的な精神状態を指す。母親のもの想いを通して、子どもが何を伝達しようとしているのかについての新たな理解を、母親は創り出す。母親は、Bion がベータ要素と呼ぶものをアルファ要素へと変形し、アルファ要素はそののちに子どもへと

再び伝達されうる。これが、コンテイナー - コンテインドモデルの第一の定義となる。具体的には、この過程は以下のステップを伴う：第一に、母親はもの想いの状態で、乳児には耐えられない諸側面—空想の中で彼女へと投影されてきた、乳児の自己、対象、情動、そして未処理の感覚体験（ベータ要素）のそうした諸側面—を、受け取り、取り入れる。第二に、ニードがある限り、彼女は自身の心と体へのこれらの投影物による全影響に耐えなくてはならない。それはそうした投影物を考え理解するためであり、**Bion** が変形と呼ぶ過程である。次に、赤ん坊の体験をこのように彼女自身の心で変形したので、彼女はそれらを乳児へと徐々に戻すのだが、それは解毒され消化可能な形で、そして（こうしたことがその子にとって役立つであろうときに）彼女がその子を扱う際の態度ややり方のなかで実際に示されつつ、なされなくてはならない。分析においては、**Bion** は本過程のこの最後の部分を公表 **publication** と呼んでおり、それは私たちが一般に解釈と呼ぶものである。

「コンテインする」能力があると想定される母親とは、境界を持ち、そして自身の乳児との関連で受けとる不安ばかりか自分自身の不安をも収容するのに十分な内的空間を持つ母親、すなわち痛みを耐え、じっくりと思いを巡らせ、考える能力、そして自らが考えることを乳児にとって意味のあるやり方で伝える能力が十分に発達している母親、である。自身が独立し、損なわれておらず、受容的で、もの想う能力があり適度に寛大である母親は、このように「コンテインする」対象として取り入れるのに適しており、長い時間をかけて少しずつ乳児がそうした対象に同一化しそれを吸収することで、心的空間が増大し、意味を作る能力が発達し、そして自ら考えることのできる心が進展し続けていく。これが、**Bion** がアルファ機能と呼ぶようになったものである。

1963年の『精神分析の要素』において、**Bion** は、コンテイナーとコンテインド—♀と♂という抽象的な記号で示される—の間の力動的な関係が精神分析の第一の要素であると見なす。ここでの♂（コンテインド）には貫く性質があり、♀（コンテイナー）には受容的な／受け取る性質がある。この文脈において、♀と♂は特定の性的な意味に限定されず、いかなる特定の性的な含意もない。それらは変数もしくは未知数を表す：♀と♂の機能はあらゆる関係の中に存在しており、性別から独立している。♂（コンテインド）は♀（コンテイナー）を貫き、♀は♂を受け取りそれと交流し、新たな産物を創り出すこととなる。♂-♀という象徴を用いることで、心の生物学的な性質が強調され、そしてまたセクシュアリティやエディプスの布置に関する **Freud** と **Klein** の概念も含まれる。のちの著作において **Bion** は、この二者（♂と♀）の間の互惠性、成長への潜在能力、そしてこの二者間の交換を強調している。コンテイナー - コンテインドの力動的な関係のパラドックスは、その互惠的な相互性にある。即ち、コンテインするものとコンテインされるものが、互いにコンテインしコンテインされるという機能を果たしもする。これは発達のには、赤ん坊の不安に対するコンテイナーとしての乳房は、その逆でもありうるということの意味する。即ち、母親のパーソナリティのある側面に対するコンテイナーとしての赤ん坊、である。

のちには臨床的な文脈の中で、この互惠性は強調される。「あるときには分析家を♀そして被分析者を♂とし、また次の瞬間には役割を逆転するという動揺を観察することの中に、糸口がある…」(Bion, 1970, p.108)。

至るところで Bion は強調しているが、「コンテインすること」は、思考を形成しそれを言葉へと変形することを可能にする活動や過程を含む。これは、コンテインすることや受け取ることを単に受身的な受容性へと矮小化し制限して使用することとは反対である。変形の複雑さおよびその多くの相や過程を十分に明らかにすることが、彼の 1965 年の著書『変形：学びから成長への変化』の核心である。ここで Bion は、「O」というメタ理論的概念を、多角的な変形過程の起点であり同時に潜在的な終点として導入する。それに含まれるのは、考えることのできない「名づけようのない恐怖」、「ベータ要素」、「もの自体」であり、そしてまた、「究極の現実」、「敬愛」そして「畏怖」である (Bion, 1965; Grotstein, 2011a, p. 506)。

コンテイナー - コンテインドは Bion の演繹的科学体系—思考及び考えることの理論 (Bion, 1962a, 1962b, 1963, 1965, 1970)—の一部分であるので、それをこの文脈に据えることは重要である。この幅広い理論によると、「思考／考え」と「考える装置」には別々の起源があり、「思考」は考える装置とは独立して存在する。つまり、「思考」は考える装置によって生み出されるわけではない。両者においてコンテイナー - コンテインド関係は決定的に重要であり、従って、コンテイナー - コンテインド関係は心的生活の胚 embryo と見ることができる。

この理論によると、「思考」が生成する過程において、コンテイナー - コンテインド関係がその最初の一步となる。心的内容 (情緒、感覚知覚) が精神的な質 mental quality (表象、思考) を持つに至るための条件は、心的内容をコンテインすることのできるコンテイナーが存在することである。この機能の原型となる対象 (「コンテイナー」、♀で表記される) は、母親の乳房、現実化されることを待つ生得的な前概念である。感覚的及び情緒的な刺激 (「内容」) はこの適切な「コンテイナー」と対になることで「コンテインド」 (♂で表記される) へと変形し、こうして「コンテイナー - コンテインド関係」を創り出す。考え手 thinker によって思考が最初に発達する瞬間である。このコンテイナー - コンテインド関係 (♀-♂) によって情緒体験の発生が可能となるが、その情緒体験はそれに質を与える結合—L (愛 love)、H (憎 hate)、K (知 knowledge, thought) —によって特徴づけられるであろう。意識からの注意を得ると、この情緒体験は、アルファ機能の働きを通してアルファ要素—心的生活のモナド【訳注：それ以上分割できない単一な実体。哲学者ライプニッツの案出した概念】—へと変形されうる。

「思考」が出現することで、それに対処するための装置が創出されざるを得なくなる。2つの基礎的なメカニズムがそのために結び付く。つまり、コンテイナー - コンテインド

(♀♂) と、妄想-分裂ポジションと抑うつポジションの間の力動的関係 (PS↔D) である。

コンテイナー-コンテインドモデルは、正の成長 (+K) もしくは負の成長 (-K) における因子として、思考の進展にも対処する。心の成長を考えると、この関係において♂と♀は相互に依存しており、お互いのためになっていて、どちらの側にも害を及ぼさない。Bion が 1962 年に共存的結合と名づけたものの特徴である。モデルで見ると、母と子は心の成長という点で、恩恵を被る (Lopez-Corvo, 2002, p.158)。子どもはこの二人組の間での活動を取り入れるのだが、それは、♀/♂ (コンテイナー/コンテインド) 関係がその子自身の中に据えられて、生涯を通して生じるであろう心の問題に取り組むために人格がより複雑で創造的になることを促進する機能が発達できるようなやり方で、取り入れるのである。

Bion が Elliott Jacques (1960) の「まとまりのある網状組織 integrative reticulum」を用いて組み立てたモデルでは、「その間隙は袖で、網状組織の編み目をなす縫い糸は情動である」(Bion, 1962, p. 92)。網状組織はまた、未知のものに対するある程度の寛容さを必然的に含む過程を通して、成長しつつある♂「内容」を受容する [形を成していく袖は、未だ内容を待っている]。他方、学ぶことは、弾力性を増しながらまとまりを保つ♀の能力—胎児の成長に合わせて拡張していく子宮に大変似ている—にかかっている (Sandler, 2009)。

『注意と解釈』(1970)において本概念を再検討するなかで、Bion はコンテイナーとコンテインドの間の結合 (愛、憎、知) という以前の定式化 (Bion, 1962) を脇へ置き、コンテイナーとコンテインドの関係を強調する新たなアプローチを提示する。ここでは 3 タイプの結合はそれぞれ、共存的、共生的、寄生的という特徴を持つ。「共存的」で彼が意味するのは、2 つの対象が第三者を共有し、それが三者すべての利益になるような関係であり、例として、コンテイナーとコンテインドが属する文化の諸原理が挙げられる。「共生的」によって彼が理解するのは、相互の利益のために互いに依存するような関係である。この種の関係では、投影同一化がコミュニケーションとして使用され、コンテイナーがこれを両者のために新たな意味へと変形する。「寄生的」によって彼が意味するのは、互いに依存することで第三者を生み出すが、それが三者すべてに破壊的であるような関係である。その場合には、投影同一化は爆発してコンテイナーを破壊する。コンテイナーもまた、内容にとって破壊的である。コンテイナーはコンテインドから貫くという性質を剥ぎ取り、内容はコンテイナーからその受容的な性質を剥ぎ取る (Bion, 1970, p. 95)。

破壊的な結合が示唆するのは、コンテイナー/コンテインドの失敗である。発達的には、あまりにも強い攻撃性や羨望の気質が赤ん坊にあるとき、あるいは欲求不満を引き起こす体験における不安や恐怖に対するその子の耐性が低いときに、たとえ母親に通常のコ

コンテナ機能があっても成長を十分に促進できないことがある。母親が返す応答や行動は赤ん坊が不安や恐怖を和らげるのに十分ではなく、赤ん坊が母親のコンテイング機能を取り入れて同一化し、それを自分自身の一部とすることが困難となる。反対に、たとえ赤ん坊の気質が正常であっても母親のコンテイング機能が不十分であるときには、赤ん坊から投影されている不安体験を母親が十分に理解し把握することはできない。そのような状況では、母親が赤ん坊に戻すものはまとまりがなく、意味は混乱しており、それゆえ赤ん坊はその子自身の意味ある体験としてそれを受け取ることができない。

このように、成長を促す+Kと並行して、♂記号であるコンテインドと♀記号であるコンテナーの間の共生的あるいは寄生的関係を示唆する-Kが存在する。こうした関係は情緒状況に対処するまた別の方法であり、思考やその結果成生じる成長とは対立するであろう。すなわち、相互破壊に至るかもしれない関係である。

コンテインメントという概念を社会システムに適用する際に Bion が述べたのは、集団（もしくは固定化された社会秩序、体制）と神秘家—新しいが潜在的には状況を不安定にさせるアイディアを集団へともたらず個人—の間の葛藤であった。新しいアイディアを象徴する個人は集団の中にコンテインされる必要があるが、これによりその新しいアイディアは集団によって押しつぶされるか、あるいは集団がその圧力のもとに崩壊するかのいずれかが起こりうる。

-K の出現とともに羨望と恐怖感の存在が認められるが、これらは断固として協力し、心的生活の Bion モデルには欠かせない思考や必須である創造性を発達させないようにする。-(♀♂)(マイナスコンテナー-コンテインド)の布置がもたらすのは、道徳性の膨張と「超-超自我 super-superego—なかったことにして学びを消し去ることの道徳的な優位性や、あらゆることについて欠点を見つけることの利点を主張する—」(Sandler, 2009, pp. 262-263)なるものの出現である。

この文脈で、次のことに注目するのは興味深い。すなわち、1970年の著書『注意と解釈』において Bion は修正したコンテナー-コンテインドに言及し、初め破局的変化—そこでは、双方の要素がともに広がっていく—として提示した。

1970年に発表された『注意と解釈：精神分析と集団における洞察への科学的アプローチ』においてビオンが自身の理論体系をまとめ上げてさらに展開したとき、「コンテインメント」への寄与はささやかに見えたものの、それは革新的に精神分析を新しく組織する重要な概念となった。それによって分析家とセラピストは「両陣営から」、乳児-母親間の情緒的で前言語的なコミュニケーションについて、共通語で話すことが可能となった。L（愛）H（憎）K（知）—これらはコンテナー/コンテインドに奉仕したり相互に作用し合ったりするものだった—の機能を改造することともに、「コンテナー/コンテインド」によって、Bion は心の地形の頂きへと至る大変新しい道を切り開いたようだった。

それまで、自己内部においても自己と対象の間においても、生じてくる交流の性質は取り入れと投影（のちには取り入れ同一化と投影同一化）の作用に限られていた。後者2つの機能はそれに続くあらゆる防衛機制の発達のな前駆体であり、精神分析の一者モデル—精神内構造は主体の諸表象のみから成るとされていた—の限界を示していた。

コンテイナー／コンテインドにおいて、Bionは母親と乳児の間の基本的なコミュニケーションに関する比類のない認識論を展開した。その中では、考えることの初期過程が、乳児が「考える人のいない考え（情緒）」(Bion, 1970, p.104)をコンテイナーとしての母親へと投影同一化することで始まり、母親のもの想いやアルファ機能がそれらを考えることのできる考え、感情、夢、記憶へと変形する。そうしたコミュニケーションを通して、「乳児が自分自身の内的なコンテイナー対象へと投影することによって、自身のアルファ機能を用いて自分で考え始める」(Grotstein, 2005, p. 105)につれて、乳児のアルファ機能は成熟する。発達のそして臨床的には、コンテイナー／コンテインドの機能は、2人の参与者間で対話的に反転する。Grotstein (2005)の見解では、「乳児-母親-投影-コンテイナーのチーム」は、それ以上削ることのできない二者モデルを表しており、そうすると、投影と取り入れそして／あるいは投影同一化に基づくそれまでの一者モデルは、失敗したコンテインメントの帰結の既定値^{デフォルト}となるのかもしれない。その臨床版においては、コンテイナー／コンテインドという二者モデルは、被分析者に焦点づけられたままであるものの、分析家の存在や活動を含む。この相互交流の分析場面が、ひとたびこうして二者間の三次元的な光景へと広げられると、間主体的な視点（「頂点」）が探究されうる。コンテインメントはいまや、あらゆる転移／逆転移現象とまでは言わないまでも、その多くを増大させると見なされ、2人の間の潜在的な絆（「隠れた秩序」）となるであろう (Grotstein, 2011b)。

きわめて理論的な旅路の幾つかにおいて、Bion (1965, 1970, 1992)はコンテインメントという自身の概念を、プラトンのイデア的形相やカントのもの自体と結び付けている。ここでは投影する主体は、一連のL、H、Kを伴うコンテイナー／コンテインドの特定の類似物を活性化するのであるが、それらは、対応するイデア的形相ともの自体という元々そこにあった普遍的状態の中に潜在していたものなのである。

IV. Bion 以降の発展

Bion 以降の精神分析家達は、コンテイナー-コンテインドのモデルの様々な側面について議論し、詳述し、さらに発展させてきた。そのような詳述とさらなる発展の例はいくつかの精神分析の地域に渡って世界的に広がっており、以下の通りである。

英国では Ronald Britton(1998)が、いかに言葉が情緒的体験のコンテイナーを提供し、その周りに「意味の境界」を創造する一方で、分析状況そのものが「境界のある世界」と意味が見出される場所を提供するかを強調している。彼はコンテイナー-コンテインドの相互に破壊的な関係、「悪性のコンテインメント」について詳述してもいる。そこでは新しい考えの導入に直面した主体は2つの（破局的な）選択肢、「幽閉か断片化か」しか想像できないのだ。Betty Joseph の著作は、心的平衡を維持するための投影同一化のコミュニケーションの側面と、この過程がコンテインされた場合に心的変化へと至る可能性を強調している (Joseph, 1989)。

James Grotstein (1981, 2005)、Robert Caper (1999)、Thomas Ogden (2004)らの北アメリカの分析家達も、この概念への多大な貢献をしてきた。前言語的な pre-lexical コンテイナー/コンテインドのコミュニケーション内の伝達の過程を明記し、Grotstein は「投影超同一化 projective transidentification」の概念を発展させた：「そのようにして、分析家が被分析者の・・・体験のコンテイナーとして振る舞い、・・・被分析者は自身から痛みを取り除き分析家についての自身のイメージを操作することで分析家のなかにこの状態を引き起こすことを望みながら、無意識的に自身の情緒的状态を分析家についての自身のイメージのなかに**投影的に同一化する**・・・。分析家は、この共同任務における有用な共同参加者になるつもりであり、開かれて受容的になる・・・。これは最終的に被分析者の投影による自分自身のイメージの、分析家の逆創造になる・・・」 (Grotstein, 2005, p. 1064)。Caper は、コンテインメントの主要な要素は、投影された部分について考え、それからそれをより対処しやすい形で返すことができるように、投影された部分に対する現実的な姿勢を保つために投影を受容する対象の能力も含むと強調している。彼はこれについて、患者の自己愛 narcissism を支持することを主な目的としたものである単なる抱えることを超えたものとして理解している。Thomas Ogden の著作は投影同一化に巻き込まれている相互に交流する主体に焦点を当てている。コンテイナー-コンテインドのモデルは、今ではクライン派の中だけでなくその外においても広く受け入れられている。とりわけ、Arnold Modell (1989) は、全体としての精神分析設定のコンテインする機能を強調しており、そして Judith Mitrani (1999, 2001)は、様々な発達のそして（精神）身体的状態にとっての、転移-逆転移のパラダイムの内部におけるコンテインする分析家の機能の重要性を詳述している。

Louis Brunet (2010)による現代のフランス系カナダ圏のモデルは、この主題についての「後期ビオン派」(Grotstein, 2005)とフランスの思索の統合の一例であり、この概念の特異的な臨床的解釈を提供している。ここでは、コンテインメントは「空想的 fantasmatic」と「現実的」の両方の側面を持ち、合わせて理解される必要がある。患者と分析家の両方のこのころのなかには精神内界的および「空想的」な側面があり、そして分析家や対象からの「現実的」な反応がある。以下は、十分にコンテインする反応に至るための5段階を要約した分類である：

1. その開始点は、破壊することのできない潜在的な対象の存在についての患者の無意識的空想と関連した患者の投影同一化（分析家のなかに排泄/投影された苦痛な内容）で構成されるかもしれない。その破壊することのできない対象は、それらの危険な投影を「コンテインする」ことができるであろう対象であり、そしてその子どもに（患者に）この内容の「耐えられる」「統合できる」バージョンを返すかもしれない；
2. この最初の「精神内界の」動きに続いて、患者もしくは子どもは、インフラ言語的 *infra-verbal* 【訳注：非言語的に伝わるもの】および言語的なコミュニケーション、態度、振る舞いを加え、それらは主体（分析家、親）に対する情緒的な誘発として作用する。これらの誘発は、投影されたものを分析家を感じさせて取り入れさせるために「分析家に接触」しようとする試みである(Grotstein, 2005 を参照)；
3. 「現実の」対象—母親、分析家—は、接触され、印象づけられ、動かされ、攻撃され、実に患者/子どもからの蒼古的な要素の転移によって必要とされるあらゆるやり方で使用される準備ができていなければならない；
4. 母親、分析家は、いくらか意識的にだが主には無意識的に、同一化を通して情緒を感じる。そのような同一化と分析家/母親自身の「触発された」不安と葛藤の混合は、混合物としての自己-対象を創り出す。De M'Uzan (1994)はキメラ【訳注：ギリシア神話に登場するライオンの頭と山羊の胴体と毒蛇の尻尾を持つ怪物。異質同体の意】の概念を用いてこの側面を研究している；
5. このキメラは分析家によって「理解され変形され」なくてはならない。この作業は患者/子どもの投影と、その投影によって動かされた分析家/母親自身の葛藤と情動の両方の「心的消化」として見なされるかもしれない。分析家はそれから「消化できる内容」を返さなくてはならないが、それには患者に逆-投影同一化を送り返してしまう危険がある。

中南米では、Cassorla (2013)が慢性的なエナクトメント（エナクトメントの別項を参照）の文脈における、コンテインし象徴化する分析家の機能について詳述している。彼は、慢性的なエナクトメントの間に分析家を使用する暗黙のコンテインし象徴化するアルファ機能の産物としての象徴化する能力について書いている。この文脈のなかでは、分析家の暗黙のアルファ機能は、分析過程を侵食している妨害的な動きに持ちこたえる（コンテインする）分析家の能力であるが、そのような動きが被分析者によって意味のあるものとして体験されるようになるために、生起していることを理解しようとする新しいアプローチの追求を諦めることなく、分析家は今後（エナクトメントの）解釈をするべく準備するのである。

V. 関連する概念

コンテイナー／コンテインドのモデルは、その他のこころの「空間」の概念と並行して発展してきた。それらは考えること/象徴化すること/メンタライズすることの能力を発展させるための母親の機能を内在化する必要性に焦点を当てている。

コンテインメントは抱えること(Winnicott, 1960)とは区別されなければならない。D.W. Winnicott の抱えること/概念は、コンテインメントの概念と同じく、乳児を母親から独立したものとして理解することはできないことや、母親の「抱える」機能の内在化が精神の発達に必要なことを伝えている。しかしながら、抱えることは、乳児のニーズへの高まった心的感受性、そして、身体的に抱えることおよび全体的な環境の提供、の両方を含んだより広範な用語である(Winnicott, 1960)。一方で、コンテインメントは対象の側のさらに積極的な精神内界的な関わりを意味し、より対象のパーソナリティに基づいている。

Esther Bick (1968)、Donald Meltzer(1975)、Didier Anzieu(1989)は、少し違ったやり方で、コンテインする機能を持つ皮膚自我の発達を概念化している。André Green(1999)は、象徴化のための内的空間を創造するための母親機能の陰性幻覚の必要性について書いている。これらの分析家たちは、心的空間がまだ達成されていないと想定される状態や、一次的そして付着同一化といった関係することについての他の原始的な方法（投影同一化以前の）へも注目を促しているという点で、Bion とは異なっている。

VI. 現在の使用法と結論

コンテイナー・コンテインドのモデルは現代の精神分析において広く応用されている。精神分析臨床においては、コンテインする機能は理論的志向に関わらず現代の精神分析家の大多数によって非常に重要であると考えられている。この用語は投影同一化の過程を理解するためだけでなく、外傷および/もしくは未分化な心的状態のために過剰な緊張/情緒に支配された心的状態を扱う際にも適用できる。今日では、多くの分析家が、母親のもの想いやアルファ機能だけでなく、父親機能の内在化の重要性も強調するだろう。つまり、父親の母親とのつながりによって、母親がバランスの取れた精神状態を維持することを可能にしており、母親は乳児のニーズに関心を払いながらも同時に三角空間の存在を受け入れるのだ。

Bion のコンテインメントの理論は治療効果についての新たな論拠を提供する。それは知ることの情緒的体験に基づいた考えることの理論であり、彼はそれを「K」と呼ぶ。Bion は治療的邂逅における真実を探求しており、彼にとっては食物が身体に必須なのと同様に真

実はここに必須なのだ。技法の点では、心的変化をもたらすために「コンテインメント」の心的作業を要するであろう患者からの持ち込みに関して、セッション中に分析家を方向付けることに役立つ。

以下も参照のこと：

エナクトメント

投影同一化（近日掲載予定）

参考文献

Anzieu, D. (1989). *The Skin Ego*. New Haven: Yale University Press. 福田素子訳 (1993) : 皮膚-自我. 言叢社, 東京

Auchincloss, E. and Samberg, E. (Eds.) (2012). *Psychoanalytic Terms and Concepts*. New Haven: Yale University Press.

Bick, E. (1968). The Experience of the Skin in Early Object Relations. *Int. J. Psycho-Anal.*, 49: 484-486. 古賀靖彦訳 松木邦裕監訳 (1993) : 早期対象関係における皮膚の体験. 岩崎学術出版社, 東京

Bion W.R. (1959). Attacks on linking. *International Journal of Psychoanalysis* 30:308-15, 1959, republished in Bion, W.R. (1967). *Second Thoughts*. Heinemann, 1967, pp 93-109. 中川慎一郎訳、松木邦裕監訳 (2007) : 連結することへの攻撃. 再考：精神病の精神分析論. 金剛出版, 東京

Bion, W.R. (1962a). *Learning from Experience*. London: Tavistock. 福本修訳(1999) : 経験から学ぶこと. 精神分析の方法 I—セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局, 東京

Bion, W.R. (1962b). The Psycho-Analytic Study of Thinking. *International Journal of Psycho-Analysis*, 43:306-310 中川慎一郎訳、松木邦裕監訳 (2007) : 考えることに関する理論. 再考：精神病の精神分析論. 金剛出版, 東京

Bion, W.R. (1963). *Elements of Psycho-Analysis*. London: Heinemann. 福本修訳(1999) : 精神分析の要素. 精神分析の方法 I—セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局, 東京

Bion, W.R. (1965). *Transformations: Change from Learning to Growth*. London:

- Tavistock. 福本修・平井正三訳(2002): 変形. 精神分析の方法Ⅱ—セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局, 東京
- Bion, W.R. (1970). *Attention and Interpretation*. London: Tavistock. 福本修・平井正三訳(2002): 注意と解釈. 精神分析の方法Ⅱ—セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局, 東京
- Bion, W.R. (1984). *Second Thoughts: Selected Papers on Psychoanalysis*. London: Karnac. 中川慎一郎訳、松木邦裕監訳 (2007): 再考: 精神病の精神分析論. 金剛出版, 東京
- Bion, W. R. (1992). *Cogitations*. London: Karnac.
- Britton, R (1998). *Belief and Imagination*. London: Routledge. 古賀靖彦訳、松木邦裕監訳 (2002): 信念と想像: 精神分析のこころの探求. 金剛出版, 東京
- Brunet, L. (2010). *Limites, transferts archaïques et fonctions contenantes. In Les psychoses. Traité de psychopathologie de l'adulte*. C. Chabert, ed., Paris: Dunod, 133-172.
- Caper, R. (1999). *A Mind of One's Own*. London: Routledge. 松木邦裕監訳 (2011): 米国クライン派の臨床—自分自身のこころ. 岩崎学術出版社, 東京
- Cassorla, RMS (2013). When the Analyst Becomes Stupid. An Attempt to Understand Enactment Using Bion's Theory of Thinking. *Psychoanal Q*, 82: 323-360.
- De M'Uzan, M. (1994). *La Bouche de l'inconscient*. Paris: Gallimard.
- Green, A. (1999). *The Work of the Negative*. London: Free Association Books
- Grotstein, J.S. (1981). Wilfred R. Bion: The Man, the Psychoanalyst, The Mystic. A perspective on his life and work. *Contemporary Psychoanal.*, 17:501-536
- Grotstein, J. (2005). 'Projective Transidentification': An Extension of the Concept of Projective Identification. *Int. J. Psycho-Anal.*, 86: 1051-1069.
- Grotstein, J. (2011a). Bion's Dream: A Reading of the Autobiographies. By Meg Harris Williams. London: Karnac, 2010. 131 pp. *Psychoanalytic Quarterly*, 80:504-510.
- Grotstein, J. (2011b). "The Psychoanalytic Covenant: The Hidden Order of Transference and Countertransference." 2011 Franz Alexander Lecture, Sponsored by the New Center for Psychoanalysis. Friday March 25, 2011.
- Jaques, E. (1960). Disturbances in the Capacity to Work. *International Journal of Psycho-Analysis*, 41:357-367.

- Joseph, B. (1989). *Psychic Equilibrium and Psychic Change*. London: Routledge. 小川豊昭訳 (2005) : 心的平衡と心的変化. 岩崎学術出版社, 東京
- Klein, M. (1946). Notes on Some Schizoid Mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis*, 27:99-110. 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳 (1985) : 分裂的機制についての覚書. メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界. 誠信書房, 東京
- Lopez Corvo, R.E. (2002). *Diccionario de la obra de Wilfred R. Bion*. Madrid: Biblioteca Nueva.
- Meltzer, D. (2008). *Explorations in Autism*. London: Karnac. 平井正三監訳 (2014) : 自閉症世界の探求—精神分析的研究より. 金剛出版, 東京
- Ogden, T. (2004). On Holding and Containing, Being and Dreaming. *Int. J. Psycho-Anal.*, 85:1349-1364.
- Mitrani, J. (1999). The Case of 'The Flying Dutchman' and the Search for a Containing Object. *Int. J. Psycho-Anal.*, 80:47-69.
- Mitrani, J.L. (2001). 'Taking the Transference': Some Technical Implications in three Papers by Bion. *Int. J. Psycho-Anal.*, 82:1085-1104.
- Modell, A.H. (1989). The Psychoanalytic Setting as a Container of Multiple Levels of Reality: A Perspective on the Theory of Psychoanalytic Treatment. *Psychoanal. Inq.*, 9: 67-87.
- Rosenfeld, H. (1959). An Investigation Into the Psycho-Analytic Theory of Depression. *Int. J. Psycho-Anal.*, 40:105-129.
- Rosenfeld, H. (1969). On the Treatment of Psychotic States by Psychoanalysis: An Historical Approach. *Int. J. Psycho-Anal.*, 50:615-631.
- Sandler, P.C. (2009). *A clinical application of Bion's ideas- Dreaming, transformation, containment and change*. London: Karnac.
- Skelton, R. (Ed). (2006). *The Edinburgh International Encyclopaedia of Psychoanalysis*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Winnicott, D.W. (1960). The Theory of the Parent-Infant Relationship. *Int. J. Psycho- Anal.*, 41: 585-595. 牛島定信訳 (1977) : 親と幼児の関係に関する理論. 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社, 東京

各地域の顧問と貢献者

ヨーロッパ : Sølvi Kristiansen, Cand. Psychol.; and Dimitris-James Jackson, MD

中南米 : Vera Regina, J.R.M. Fonseca, MD, PhD; João Carlos Braga, MD, PhD;

Antonio Carlos Eva, MD, PhD; Cecil Rezze, MD; and Ana Clara D. Gavião, PhD

北米 : Louis Brunet, PhD; Eve Caligor, MD; James Grotstein, MD; Takayuki

Kinugasa, MD; Judith Mitrani, PhD; and Leigh Tobias, PhD

地域間連携共同議長 : Eva D. Papiasvili, PhD, ABPP

追加英語編集補助 : Leigh Tobias, PhD

国際精神分析学会地域間精神分析百科事典 (The IPA Inter-Regional Encyclopedic Dictionary of Psychoanalysis) は、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス CC-BY-NC-ND が付けられて出版許可されています。中核的権利は著者ら (IPA と IPA 会員寄稿者) にありますが、非営利的使用、全出典が IPA (この URL www.ipa.world/IPA/Encyclopedic_Dictionary の参照も含みます) にあること、模倣や編集やリミックスの形式でなく逐語的複製であること、などの条件で他者も素材を使用することができます。各用語についてはこちらをクリックしてください。

訳出 : 清野百合、原田康平 (訳)、吾妻壮 (監訳)